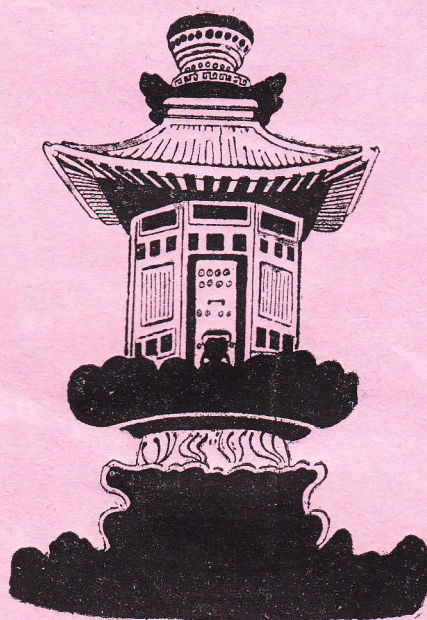


草堂寺简介

附（鸠摩罗什法师传略）
（圭峰定慧禅师传略）



姚秦三藏法师鸠摩罗什舍利塔

「草堂寺案内」

附「鳩摩羅什法師略伝・主峰定慧禅師略伝」



「姚秦三蔵法師鳩摩羅什舍利塔」

三宝弟子法航楊作舟
省仏教協会会長許力功
中共戸県県委員会広報部

整理
審査
認可

西暦 1987 年
仏暦 2531 年
旧暦 4 月 8 日仏誕生節

日本語版

訳 木藤 啓子
監修 三石 善吉 (筑波大学・教授)

草堂寺の歴史略記

姚秦創立訳経場

姚秦、訳経道場を創設し

什密先後共流芳

鳩摩羅什、圭峰定慧、前後して世に名を残す

宝塔莊嚴圭峰下

宝塔は莊嚴にして圭峰山の麓

永留慈護草堂

永くここに留まり草堂を護ったという

草堂寺は、戸県の東南 20 キロメートルの圭峰山の麓に位置する。現在は宋村郷に属する。西安を隔つことおよそ 30 キロメートル。昔は後秦、姚興逍遙園の一部であった。西域の高僧鳩摩羅什はかつてここで経を訳したのである。隋の費長房の「歴代三宝記」に、「世に大寺と称す。これ本名にあらず、中に一堂を構え、仮に草で葺いてある。すなわち、その中で... 仏典を翻訳した。」と記している。故に「草堂」という。古来より名勝の地で終南山にも近い。ここは形や名前とは違い、山紫水明で霊驗あらたかである。八景に列せられ、その中の筆頭である。ここはわが国ではじめて設置された仏教經典の翻訳のための国立訳経道場である。そしてここは、中印仏教文化交流の主要な発信基地である。鳩摩羅什により經典翻訳以来、この地はわが国有数の仏教名刹となりその名声は国外にも聞こえている。寺には多くの重要文物が保存され、1956 年には省の重点文物保護建物に指定された。

鳩摩羅什は後秦の弘始 3 年、すなわち、東晋の隆安 5 年（401 年）、姚興の招聘に応じ長安に入った。姚興は国師の礼をもって彼を接遇し、逍遙園西名閣に迎え入れ、仏典の翻訳に当たらせた。鳩摩羅什は弘始 4 年から 15 年まで訳経を続けたが、この間次第に各地から佛典を学ぶ僧侶たちが長安に集まるようになり、その数は 3000 人にも達した。その中には僧肇、僧叡、道融、曇影など四聖八俊と称される弟子たちもあり、強力な助手となった。「大唐内典録」三卷によれば、翻訳した大乘經論は 98 部、435 卷にのぼる。鳩摩羅什は訳経のかたわら、逍遙園澄玄堂や草堂寺でしばしば仏典の講釈を行った。「晋書」によれば、「姚興、逍遙園に赴き僧侶らを澄玄堂に集め鳩摩羅什の仏經説法を

聞かせたところ当時僧侶らは遠方からも集まりその数 5000 人となった。」この記述からも当時の訳経事業の規模の大きかったことがうかがわれる。

鳩摩羅什の訳した経論は中国仏教の多くの宗派に関係している。その三論宗と日本の日蓮宗はいずれも草堂寺を発祥の地として奉じている。鳩摩羅什は傑出した仏教学者である。彼は中国文化の発展史上に偉大な貢献を行った。彼は中国仏教の三大訳経師の第一師であり、また中国翻訳史上の一大翻訳家である。

「歴代三宝記」にはまた、「魏末周初（535 年）、一斉区画整理があり、大寺は四堂伽藍となり、草堂寺は元来一寺だったのを、草堂東は僧の常住する寺に、その南の京姚王寺に分かれ、後者は後に安定国寺と改まる。安定国西は大乗寺、天街東にある。八隅に大井戸あり、すなわち、大寺の東厨房で 3000 の僧に甘泉を供するなり。」と記している。

明趙函の「石墨華鐫記」に曰く、「草堂の石碑に、唐の高祖李淵が鄆州刺史の頃、かつて隋の大業 2 年（606 年）正月 8 日、その子世民（当時太宗、9 才）が目を患い、この寺に仏の保護を求めたところ、仏恩を賜り治癒したため、石像を一体奉納した。この功德により家族らは福德に恵まれ、永年災害にも遭わず李淵は一心に供養した、と刻まれている。」（石碑はすでに散逸したが、その文は圭峰碑の裏側に模して刻んである。）太宗は即位後寺を参拝し、鳩摩羅什の訳経事業の偉大さをたたえる詩を詠んだ。その詩に曰く、

秦朝明らかに現わす聖人の星、
遠くより表われわが師の徳霊に至る。
十万の流砂来たりて錫を振り、
三千の弟子共に訳経す。
文は金玉を含み朽ちることなきを知り、
舌は蘭蓀（香草の名）に似てなお香り有り。
感嘆に堪えぬは逍遙園裡のこと、
空には明月、草青々として。

この詩は碑廊の石碑に刻まれており、仏教が唐代に栄えたことを説明しており、前述の二つのエピソードは唐王朝の仏教への篤き帰依の始まりを示すものである。

清の乾隆時代に寺の石碑を修復した。曰く、「唐の憲宗元和中頃（806年）寺を修復し改めて草堂寺とする。」魏末周初、草堂は四寺の一つであったが、この度の修復で草堂寺と称すべきこととなった。省の通史に曰く、「唐は草堂を栖禪寺と改めた。」「中国仏教」人物篇には、「鳩摩羅什死後400年を経て、穆宗の長慶元年（831年）、宗密禪師（圭峰）が戸県を訪れ、草堂寺の住職として大いに仏教を振興させた。また、草堂寺南の「圭峰蘭若」に入り経を誦し禪を修めた。」と記している。世に圭峰禪師の「栖禪」と称せられるこの名は、あるいはこのために付けられたのかもしれない。宋の乾徳4年、清涼建福院碑を改修するが碑の上部のみで本体はなくなっていた。「金石粹録」に書き写された全文およそ1500字の碑文によれば、唐の宗の時代（894年）を過ぎ、梁開年間（907年）から後周の世宗時代（954年）までの60年間に二度の屋根葺きかえの史実を記している。しかし、いつ清涼建福院に改められたかは、なお記載がない。このように草堂栖禪の名は従来どおり用いられている。金の章宗の世、明昌癸丑（1193年）辨正大師が講堂を増築したが、梁は太く高く、やぐらは広々としていた。（碑文にあるとおり）元の太宗丁未（1247年）の始め、皇太子闊端は5年間に4度の発令により草堂寺の大規模葺きかえ工事を行った。（碑文によれば）明の洪武16年（1383年）僧惠明は同寺に僧会司を建立した。清の乾隆31年（1766年）、寺僧寂法は寺を改修した。（碑によれば）雍正12年（1734年）、勅命で羅什の弟子僧肇を「大智圓正聖僧禪師」とし、寺名を聖恩寺とした。（碑文によれば）しかし、これを知る者少なく、ゆえに今日に至るまで草堂を寺の名とし、その名は歴史に残されているのみである。

当初の寺院の規模については、文献が乏しく詳細は分らないが、建福院の改修碑文によれば、「南は遠く高山に連なり、そこで寺院の域が尽きる。北は長河に接する。すべてこれ伽藍の地。」である。宋の程明道は（1059年）南

山に遊んだ時作った詩の注釈に、「寺は竹林の中心にあり、その竹林は十頃（およそ 66 ヘクタール）を覆う。」と記している。宋の唐邁には、「十頃の竹林楼閣を巡る」の詩句がある。これらから当時の寺院の規模を知ることができよう。明の正徳 15 年（1520 年）、王九思の「遊南山記」によれば、「寺の土台は広々として前殿の壁画は甚だ古く、壁には前王朝時代の詩が多く刻まれている。西南隅にある鳩摩羅什塔はあずまやになっている。」（宋の元符 3 年 = 1100 = 塔と寺の改修碑があったがすでになくなった。）これらから、この時代に寺院は比較的整っていたことがわかる。また初期の建物は鳩摩羅什塔の西北方面からさらに離れた位置にあったこともわかる。ちょうど現在の北側土塀の外側である。「遊南山記」によればさらに「その竹林は十頃にも及んだが、今では根こそぎ消失してしまった。ただ寺の裏手にある 4 本の銀杏の木だけが百年以上のものなり。」明末の崇禎年間になると（1628 年）戦乱が繰り返され、寺は焼かれ略奪の憂き目に会った。新しく建立された安善団碑の記載によれば、「寺を以って砦となし、山に因りて城となす。」そのうえ寺内にはなお 48 人の僧侶が居住し、残された仏閣もなくなり、わずかに現在の寺の位置に住んだという。（砦の中の）現在の寺院周辺の壁はすなわち、案善団の築いた城跡である。この頃から寺院の規模は次第に縮小された。乾隆時代の碑には、「寺僧はひっそりと法を修め、残った建物を修理し、天王殿 5 棟を建てた。寺内は面目を一新し、昔の情景を取り戻した。」嘉道以前の寺はまだ見る価値があったことがわかる。同治元年（1862 年）、仏閣は戦火に焼かれ、光緒 7 年（1881 年）、さらに洪水にみまわれ、廃墟となって後、幾度か再建されるものの次第に落ちふれていった。開放前、寺の外にはまだ 120 畝（およそ 10 ヘクタール）の耕地があり、当時の寺院の面積は実測およそ 52 畝（およそ 3.4 ヘクタール）であった。

宗派系図碑から見ると、本寺は唐代すでに世襲寺となっていたが、民国 25 年初め四方からも僧侶の集まる叢林と改められ、優秀な人材を住職に迎え、僧侶らにより共同管理された。文革期には僧侶は離散し、陝西省文物管理委員会が引き継いで管理に当たった。1980 年には観光拠点として開放され、宗教政策が定着するにつれ、1984 年 9 月 1 日、寺僧による直接管理に戻った。こうし

て、寺は寺らしい、僧は僧らしい新しい局面を迎えた。寺内には現在十人余の僧が居住し、正常な宗教生活を送っている。

1982年4月13日、白蓮宗友好訪華団の一行54名が遺徳をたたえ、その恩を知り恩に報いるため草堂寺を訪れ、開祖の庭に参拝した。彼らは鳩摩羅什法師の彫像を一体奉納し、わが国仏教の四衆と共に読経し、両国人民の安楽と将来の友好を祈念した。このような友好活動は、中日両国人民の友好往来を促進するだけでなく、わが国の政治的影響を強化するものである。

寺内に保存されている主要な文物

- (1) 姚秦三蔵法師鳩摩羅什舍利塔は、後秦の弘始 15 年(413 年)に建立され、今日まで 1570 余年を経てなお当時の姿を留めている。伝えられるところによれば、その石は西域からの貢物である。塔の高さ 2.6 メートル、八面十二層。玉白、磚青、墨黒、乳黄、淡黄、浅藍、赤紫、灰色の八色の宝石を彫刻しちりばめたもので、このため「八宝玉石塔」と称せられる。
- (2) 唐の圭峰定慧禅師の伝法碑は、唐の宣宗の大中 9 年（855 年）に建立され、今日すでに 1100 年以上を経ても、字跡はなお明らかである。これは宰相の裴休が文章を練り、柳公権が篆刻した。筆法は秀麗、辞句は流暢、まれにみる秀作である。
- (3) 草堂寺辨正大師塔銘碑は、金の元光 2 年（1223 年）に建てられ、仏の教えが埋もれ、僧の掟が衰えるのを救い、また草堂寺に講堂を増築した辨正大師の功績を記して、後世の人々を励ましている。
- (4) 逍遙園大草堂栖禅寺宗派系図碑は、大元の至正 12 年（1352 年）、その宗派の流れを詳細に記すために建立された。教えは広く行き渡り、逸材を輩出している。
- (5) 勅封大智圓正聖僧禅師僧肇碑は、清の雍正 12 年（1734 年）建てられた。これは、雍正帝が鳩摩羅什の訳経に協力した僧肇の功績とその徳をたたえるため、勅命にて建立したものである。
- (6) 影印宋版磧砂（砂漠）大蔵教は、民国 25 年上海大蔵教会が印刷した。全 592 冊、6362 卷。これは、1956 年張良寨寧西亭の居士が寄贈したもので、極めて貴重。草堂の価値を一層高めている。

- (7) 明鑄大鉄鐘は万歴 19 年鑄造された。重さ一万斤（5000 キログラム）。鐘は僧たちに号令するための器である。いわゆる「晩に打つはすなわち、愚鈍を醒まし蒙昧を遠ざける」である。昔は朝晩撞く鐘の音は大きく豊かで、一撞きで数十里に響きわたった。
- (8) 碑廊には唐の太宗が鳩摩羅什を讃えた詩碑、歴代の文人が仕官後寺に遊び詠んだ詩、また寺院改修記などを刻んだ石碑 21 体がある。これらの石碑は寺院の盛衰を研究する歴史資料となるだけでなく、その書の芸術性は観光客の称賛の的である。
- (9) 竹林の裏手に古井戸が一つある。これは関中八景の一つ「草堂煙霧」で、煙霧が立ち昇る井戸である。言い伝えによれば、昔この井戸は秋冬の朝夕必ず白いガスが一筋昇った。煙のような霧のようなものが井戸から立ち昇り巨大な龍のように省城の西南まで巡り、一種奇怪な幻影を呈した。このためこの井戸は「草堂煙霧」と呼ばれる。しかし、今日煙霧井戸はまだあるものの、時が経ち地質など自然環境の変化により再び煙霧を見ることはできない。ただその遺跡を留め観光客は当時を偲ぶのみである。かつての煙霧の原因は科学的に調査研究が行われており、ここではこれ以上述べることはしない。

滄桑の変により、本寺はすでに甚だしく破壊され、旧大殿五棟と僧房数棟が残るのみである。建国後、党と人民政府は歴史的文物の保護を重視し、かつて前後して五度にわたり本寺の改修と増築を行った。新旧の樓閣はすでに 45 棟に達し、寺院は面目を一新した。開放政策の実施以来、多くの国内外観光客を引きつけ、草堂寺はさらに強い光芒を放っている。今日の草堂は、悠久の歴史をもつ名所としてさまざまな容姿をもち、祖国の栄光を増し仏教の繁栄をもたらすであろう。

後記

草堂寺は開放政策の実施以来、国内外からの観光客が日を追って増加し、多くの観光客から、草堂寺の悠久の歴史や鳩摩羅什法師の訳経の足跡を辿りたいとの求めがあったので、それに応えるため、私は草堂寺の委託を受けて、1年間の資料集めと整理期間を経てこの冊子を書き上げた。本冊子の内容については筆力に限りある上、資料が乏しいことから、誤りもあるかと思う。多くの読者の皆様からご意見を頂くことにより、補足と訂正のうえ再版できればと希望している。

鳩摩羅什略伝（344 年-412 年）

鳩摩羅什（クマーラジーヴァ）、先祖の原籍は天竺（インド）。その父鳩摩羅炎（クマーラーエン）は、代々宰相の家柄に生まれそれを継ぐはずであったが、栄光を棄てて出家し、東方の葱嶺（パミール）を渡り亀茲（ケチ）国（現在の新疆庫車）に行った。亀茲国王は羅炎の賢なるを慕い国師に迎えた。国王の妹耆婆（ジークバー）は年 20 才、聡明にして明敏。各国より結婚の申し出あるもこれを受けず、羅炎に会って後心引かれ妻となり、羅什を生んだ。羅什は晋の康帝建元 2 年（344 年）生まれ。7 才の時母に従い出家し「阿毘曇經」を誦み・・・12 才で母とともに亀茲に戻った。自ら「発智論」および「六足論」を学び、「増一阿含」などの經典を誦んだ。羅什は 20 才で仏戒を王宮で受け、罽賓（カシュミール・ガンダーラ地方）の律師（戒律学者）卑摩羅叉（ハイマラチャ）から「十誦律」を学んだ。それから間もなく、羅什の母は亀茲を去り天竺へ赴くこととなり、出発に臨み息子に言った。「教えの道はいずれも等しく深い。真丹（当時インドは中国をこう呼んだ）に悟りを開き東方にこれを伝えるべし。これを行うは汝の力のみ。ただし自身に利なし。さていかなされるか。」羅什曰く、「大士の道を行うに体のことは構いません。もし必ずや大化を流布できるのなら、どんな苦勞があろうとそれを恨みに思うことはありません。」亀茲に 20 余年留まり、広く大乘經論を読み、その奥義を思索した。羅什は多くの經論を詳細に研究し大乘について学び、分からない箇所を勉強した。羅什の師盤頭達多是尋ねた。「あなたは大乘にどのような小乗との相違点をみつけてこれを明らかにしようとするのか。」羅什は例を挙げ、その理由を述べた。一ヶ月余り後、羅什師は多くの人々の信服を得るようになった。人々は羅什を師と仰いで曰く、「和尚はわが大乘師。私は和尚の小乗師。」この後羅什の名は西域に広まり、またの名を東洲と呼ばれるようになった。

苻秦の建元 15 年（379 年）、中原の僧、僧純らが亀茲の遊学から戻り、亀茲仏教の盛況ぶりを讃えた。時の高僧釈道安が長安にて訳經事業を奨励していたが、羅什の高名を聞くと、中国にこれを迎えるよう再三苻堅に勧めた。建元 18 年（382 年）、苻堅は驍騎將軍の呂光に 7 万の兵を授け、亀茲討伐に向か

わせた。呂光の出発に際し符堅は、「かの地は略奪のための地ではない。羅什という優れた仏法僧がいるらしい。兵たちに心して探させよ。」こうして亀茲を破り、羅什を連れて涼州に着いた。（甘肅の武威で）符堅が姚萇に捕らえられ殺されることを知るや、呂光は涼州にとどまり独立を宣し、国号を涼とした。姚萇もまた羅什の徳を慕い迎えようとしたがかなわず、萇亡き後、子の興が立ち、姚興の弘始3年派兵し涼を討伐した。涼の呂隆は降伏し、羅什ははじめて長安に入った。時に12月20日（401年）である。羅什は涼に18年間いたのでこの時、年すでに58才であった。姚興は羅什を国師に迎え、逍遙園西明閣にて仏教の翻訳に当たらせた。その頃より、各地から長安に集まる僧侶の数が増え始め、3000人にものぼった。羅什は弘始4年（402年）から訳経を始め、まず「大智度論」と「百論」の翻訳に着手した。翌年姚興は、旧訳經典が本来の主旨から乖離していることから、「大品般若」の再訳を依頼した。学校僧の慧恭、僧契、僧遷、僧睿など5万人以上が訳経道場に出入りし、翻訳に当たった。弘始6年、羅什は「大品」訳文を改訂し、中寺にて 賓律師、弗若多羅度語のために「十誦律」に訳出した。また、「百論」の訳文研究の後、続けて「仏藏」、「菩薩藏」などの經典を出した。弘始8年より、羅什は長安大寺に移り、「法華」、「維摩」、「華嚴」および「小品般若」などの經典、「中論」、「十二門論」などの論文を出し、最後に要請を受けて「成実論」を翻訳した。羅什は訳経の合間に、逍遙園澄玄堂や草堂寺にてさまざまな經典を講釈した。彼が弘始4年から11年までの8年間に翻訳した「大品般若経」、「法華経」、「維摩詰経」、「阿弥陀経」、「金剛経」などの經典、「中論」、「百論」、「十二門論」、「大智度論」「成実論」などの論文は、龍樹中觀学派の学説を系統的に紹介している。訳経総数は、「大唐内典録」三巻の記述によれば、98部、425巻である。

羅什は快活な精神の持ち主で、天性の率直さがあった。平素より己を空しくして専ら大乘を教え、道理を説くのに長けていた。機に応じてよく会得し、すぐれた理解力を備えていた。また、文学の才に富み、訳文の注釈は言葉にするなり文章となった。字句の意味はあいまいなようで、その実優雅さと奥深さに満ちていた。たとえば、「金剛経」、「維摩経」などの文筆の才や文章の流麗

さは、中国文学史上に新天地を開いたといえよう。羅什は高齢ではあったが、彼の訳経活動はまだやまず、ある日、僧たちを集めて曰く、翻訳した經典が後世まで伝えられることを望む。もしそれに誤訳がなければ、たとえ体は（火葬で）焼かれるとも舌は焼失することはない。弘始15年（413年）4月13日、羅什は長安逍遙園大寺にて軽い病状を訴えた後、急死した。享年70才。遺体は天竺の習慣により火葬にした。体が燃えた後、果たして舌はそのまま残っていた。塔に葬られが、葬儀後、塔の前に一輪の蓮の花が咲いた。姚興がこれに気づいて見ると、花は舌の根もとに生えている。もし、聖人でなければなぜこのようなしるしがあるのか。これは伝説上の話であるが、羅什の訳した経論に対する責任感と自信を表しているといえよう。

羅什は、中国仏教に多大の影響を与えた傑出した学者である。仏教三大訳経師の一大翻訳家である。羅什はインド五明などの学問に通じ（文学、声明、美術、歴数、医術、禁呪、論理、哲学）、弁論さわやかであった。彼の業績と名声は、世界の仏教文化の交流および中印人民の友情の発展とともに永遠に朽ちることはないだろう。

圭峰定慧禪師略伝（780-841 年）

圭峰禪師、号は宗密、俗姓は何氏。四川省西充県の人。唐の徳宗の頃建中元年（780 年）生まれる。幼少より儒書に通じ、憲宗の元和 2 年 28 才の時、貢挙試験に参加するはずだった。ところが偶然潯澤に行き、神会系の遂州大雲寺の道圓と親しくなり、彼に従って出家した。同年拯律師から全ての戒律を授けられた。ある日僧らと齋に行き、「圓覚経」を授けられ、読み終わるやたちまち悟りを開いた。戻って道圓にこれを告げると、道圓はこれを認め、彼を大弘圓頓の師とし、「華嚴法界観門」を授けた。元和 5 年、襄漢に遊び愀覚寺で澄観の弟子靈峰と会い、澄観の書いた「華嚴経疎（疎は解釈）」、「随疎演義」を授けられたが、昼夜なく研究に没頭し、この疎の文章が伸びやかで奥義に溢れていることを認識した。そこで書をしたためてはるか作者の澄観に送り弟子の礼を尽くした。また、理解したところを述べ、弟子の玄珪、智暉を澄観の所に遣わした。澄観の答書はこれを賛え、一度面会し、理解の正しさを証明したいと希望した。そこで宗密は自ら長安に赴き礼をもって謁した。この時宗密 33 才、澄観はすでに 74 才であった。この後 2 年間彼は昼も夜も澄観に仕えた。憲宗 11 年（816 年）春、終南山智炬寺にて大蔵教を読んで 3 年目、「圓覚経科義」、「圓覚経纂要」各一卷を撰した。穆宗の長慶元年（821 年）正月、清涼山に遊び戸県に戻り草堂寺に住み、「圓覚経疎」を起草し、後豊徳寺に行き、「華嚴経論貫」5 巻を著した。「華嚴経」の要所次第を明らかにした。また、草堂寺南の「圭峰蘭若」に入り、経を読み禅を修めた。大和の中文宗は、宗密を内殿に招き、仏法の大義を問い、紫の袈裟を賜り、大徳の号を与えた。この後も何度か内殿にて法を説いた。朝廷の臣下および一般の人々の中には、彼に帰依するもの多く、とくに宰相裴休はしばしば、彼の教えを受け、深遠な境地に達した。彼は常に仏の道を教え衆生を導き国家の人民教化を助けることを己れの任としていたので、門下には数千人もの僧侶、僧尼親しく集まった。武宗の会昌元年（841 年）正月 6 日、宗密は興福塔院で座したまま昇天した。享年 62 才。僧年 34 才。寂滅後もその姿はまるで生きているように毅然として、容貌には悦びが満ちていた。7 日後、道俗らは師の全身を圭峰に奉じ荼毘に付した。舍利数十個を拾ったが、いずれも明るい白色でつやつや輝いていた。これ

を興福塔院に建てた塔に納めた。宣宗から追って「定慧禪師青蓮之塔」を賜り、大中9年には門人らが草堂寺内に伝法碑を建立した。

宗密は草堂に留まり、宗風を振い、草堂を中興させたが、また圭峰蘭若にて経を誦み禅を修めた。仏法を広め道を説くことに20年久しきに及んだ。このため世に、「圭峰禪師」と称せられる。澄観から華嚴を学び悟り開き、印証を与えられた。このため、「華嚴五祖」と崇められる。彼の思想体系については、掛裴休が「大方広圓覚経疎序」の中で説いたとおり、禪師はすでに南宗の密印を佩し、圓覚玄記を受け、大蔵教律を閲し、「唯識」、「起信」などの論に精通していた。その後、華嚴法界に足を踏み入れ、圓覚の妙場に冥座し、一雨の濡れるところを究め、五教の一致を窮めた。宗密は当初荷澤宗の禅法を伝授され、「圓覚経」を究め、後にまた澄観より華嚴を学んだ。こうして、仏教と禅を融合させ、教禅一致を唱道した。彼は若い頃儒学を学んでおり、このため仏儒一源をも主張したのである。

以 上